The Plumed Serpent：女性の「服従」

内　藤　歓　修

I

イタリアのシチリア（Sicilia）島の北東岸，メッシーナ（Messina）の南48キロにある，中世のたたずまいの漂う景勝地タオルミーナ（Taormina）に滞在し，ほぼ理想的な生活をしていたD. H. Lawrenceは，所謂「リーダーシップ小説3部作」のうち *Aaron's Rod* を執筆中の1921年1月3日にサルディニア（Sardinia）の旅に立つ。約2週間後の14日に帰宅。この旅の紀行文を10月と11月に *Dial* 紙に，*Sea and Sardinia* という題で掲載した。このことが，これからの「3部作」の残りの2作を書く方向と道を彼に与え，ひいては彼の人生の経路を変える，直接のきっかけとなったのである。当時，彼の思想は新しい方向をとっていたので，彼は新しい土地，未知の世界を求めていた。

この年の6月にMartin Secker社から，*Women in Love* のイギリス版[(1)]が出版された。これに対して，彼にとって思いがけないことに，彼は親しい友人達から轟々たる非難を浴びた。この作品中でモデルにされた人物達から，激しい誹謗の嵐が沸き起こったのである。特に *Nation and Athenaeum* 誌（1921. 8. 13）[(2)]上でのJohn Middleton Murryの批評文は激しくLawrenceを非難している。「Lawrenceはかつては『自然の美について鋭敏で感動あふれる理解力』や『人間を結び付ける奇妙な血の絆の理解』などを持っていて，私たちを天才が出現するという期待の気持ちでわくわくさせたものだが，今となっては，この様な彼の特質は『激しい，強烈な感情の酸』の中に溶けてしまい，最早私たちを何等喜ばすものではない」などと酷評しているのである。

更に *John Bull* 誌（1921. 9. 17）[(3)]では *Women in Love* は「警察が発禁にすべき本」とか，「若者を言語に絶する不幸に導く性の堕落の忌まわしい研究」などと非難された。その上，Martin Seckerは手紙で，Lawrenceの友人Philip Heseltineがこの作品中でHalliday のモデルにされたと怒って，訴訟を起こすと騒いでいると言ってきた。そして少なくとも，他に6人の人々が訴訟を起こしそうだということで，Seckerも大いに慌てたのであった。この騒ぎは，*Aaron's Rod* の出版にも大きな影響を与え，一旦はこの作品は中傷的な事柄が余りに多いので，受け取れないという手紙すら，彼の著作物出版の代理人から来たこともあったのである。

この様なモデル問題は，例え Lawrence には悪意がないとしても，彼の作品全体を通じてはかなり起っており，幾人もの人々の心を傷付けている。更に *Jimmy and the Desperate Woman* (1924) や *Smile* (1926) に於て，彼の信奉者で，文学上の弟子とも言うべき，John Middleton Murry に対して，*Things* でも，アメリカの画家で，仏教研究を志している Earl H. Brewster に対して，それ迄の友情を裏切るように，風刺的，或は批判的な描写をしている。文学作品のモデルの問題は論じるのは難しいにしても，人格的または人柄という点で，Lawrence は世間的な常識から見ると，標準以下と言われても仕方がないという一面はあろう。尤も，このことが文学作品としての彼の著作物の良否に関係するとは必ずしも言えないであろうが。

彼の方は，自分が友人達を，この様に怒らせているとは思いもよらなかったに違いない。自分が悪かったと非を認めなければ，四方八方敵だらけ，正に四面楚歌の状態で「全ての人を憎んで一ケ月」を過ごさなければならなかったし，この有様では，彼の性格では「かんしゃくを起こ」さざるを得なかったであろう。彼はこうした憤懣の気持ちを Brewster への手紙[(4)]に，次の様にぶつけている。

> I've been in a hell of a temper for three weeks: blank refused to see anybody after the Fisher's last visit: and only the Baron Stempel came and gave me a headache. I begrudged him his tea: and detested him. I've been so disagreeable to old Grace, rooking me, that now she creeps about as if a dagger was at her neck. I've written such very spiteful letters to everybody that now the postman never comes. And I believe even the old Capra doesn't have her belated kid for fear I pounce on her.—But it is a world of *canaille*: absolutely. Canaille, canaglia, Schweinhunderei*, stink-pots. Pfui!—pish, pshaw, prrr! They all stink in my nostrils.
>
> *'Rabble, swineherd's dog', i.e. dirty wretches.

彼にとって，ヨーロッパは自分の故郷であり，愛着の深い所であるが，愛着が深ければ深いだけ，故郷に裏切られた気持ちは益々大きくなり，憎悪は深い愛情の裏返しとして更に激しくなるのであった。彼はヨーロッパに大きな幻滅を感じるのである。'Europe is my own continent, so I feel bad about it. I feel as if it was dying under my eyes.' とヨーロッパに絶望し，'So when I leave Europe, I feel I want to go for ever.' といった突き詰めた気持ちになる。この息詰まるような旧い世界であるヨーロッパから抜け出し，自分の思想を自由に発展させ，飛躍させることの出来る新世界を無意識のうちにも渇望していたのであろう。

こうした状態の時，憤懣の気持ちを表した上記の Brewster 宛の手紙を書いた3日後の11月5日，偶然にも Lawrence は見知らぬ人から1通の手紙を受け取る。それはアメリカ，ニュー・メキシコ州タオス (Taos) 在住の Mabel Dodge Luhan からのものであり，Lawrence にタオスへ来て住むよう要請する招待状であった。彼女は Lawrence の妻 Frieda と同じ年に生まれ，ニュー・ヨーク州の富裕な銀行家の一人娘であった。幾度か結婚し，1923年にインディアンの Antonio (Tony) Luhan と結婚した。彼女は芸術や文学の愛好者であり庇護者でもあった。タ

オスの広大な私有地に芸術家や文学者のための「町」を造っていた。そんな折，彼女は *Dial* 誌に10月に掲載された Lawrence の紀行文 *Sea and Sardinia* を読み大変感動し，この作者ならタオスについても素晴らしい文を書いてくれるだろうと考えた。そこでこの実践的な活動家の女性は，早速 Lawrence に住む場所を提供するという条件で来訪してくれるようにという手紙を書いたのであった。Lawrence はこの手紙を受け取るとすぐに返事を認め，この招待を受け入れたいという同日付けの返事を彼女に送った。彼の意識の下には，この旧いヨーロッパから離れ，未知の国を求める気持ちが激しく動いていたのであろう。殆ど旅行の計画など何も考えずに，この申し出を受けている。Mabel はこの返事を受け取って大いに喜び，Lawrence を受け入れるために新しい家迄建てたのであった。

しかし Lawrence はすぐに当地タオルミーナを発たなかった。彼はこの暫く前に Earl H. Brewster にセイロン行きの約束をしていたのである。結局，1922年2月，セイロン行きの約束を取り，タオルミーナを出発する。先に行った Brewster 夫妻の後を追って，2月26日夜8時，ナポリからオスタリー（Osterley）号に乗船しセイロンに向かったのである。3月13日頃漸くセイロンに着き，コロンボで Brewster 夫妻と再会した。だが，余りの暑さに身体が参り，約1ケ月半後の4月24日には早々に当地を去り，オーストラリアに向かう。アメリカに行く途中にたまたまこの国があり，セイロンより涼しいから寄るといった程度の考えであったが，上陸してみると，Lawrence は思いがけずにこの国が気に入り，暫くの間滞在することとなった。この国で彼は8番目の長編 *Kangaroo* の大部分を殆ど一気に書き上げた。この作品は当時の Lawrence の心境を最も素直に，且つ正直に伝えている。

約2ケ月でこの作品を大体仕上げてしまった Lawrence は，8月19日シドニーを出発し，9月4日にサンフランシスコに上陸した。ヨーロッパの旧大陸を離れ，9ケ月かかってアメリカという新大陸に到着したのである。1週間後の9月11日にタオスの Mabel Dodge Luhan 邸に着き，やっと彼女との約束を果たすことが出来たのであった。

Mabel は自分の「メイベル・タウン」(Mabel town) に Lawrence 夫妻のために一軒屋を用意していてくれた。こうして Mabel の所に落ち着いた彼らは，最初のうちはそこに滞在することに大いに満足した。ニュー・メキシコについてのエッセイ New Mexico[(5)]（1931年発表）の中で，彼は当地は自分を「永遠に変えてしまい，現代文明から解放してくれた」と述べ，この地の自分への影響が如何に大きかったかを記している。しかし，メイベル・タウンでの生活は日が立つにつれて，余り快適ではなくなってきた[(6)]。Mabel と妻 Frieda とのいさかいや反目が激しくなってきたからである。Frieda は自由奔放な，自我の強い女性であった。また Mabel も波乱の人生を送ってきた，個性的で我の強い女性であった。Frieda は妻，Mabel は女保護者。この立場で2人は Lawrence を間にして，いさかいを起こし喧嘩を始める。Frieda は夫の天才を理解し，守り，伸ばすことの出来るのは自分しかいないし，その天才が捧げられるべき人は自分であると

自負していた。一方，Mabel は当地に於ける保護者は自分であるということを笠に着た，干渉的態度（と Frieda には感じられた）で，Lawrence と幾度となく２人きりで話し合ったり，ことさらに親密さを示したりした。この様な２人の女性の間の感情的対立に，Lawrence は Mabel の近くにこれ以上住むのはよくないことを知り，タオスから25キロ程離れたデル・モンテ牧場 (Del Monte Ranch) に，12月１日移り住む[7]。ロッキー山脈を背にし，前方には荒涼とした平地を望むこの土地は，人間の世界から隔絶されており，Lawrence にとって理想的な環境とも言える場所であったろう。ここで夫妻は現代文明から遠く離れ，真に原始的な生活を翌年の３月下旬迄送ることとなった。

1923年３月18日，Lawrence 夫妻は，ここを離れ，メキシコへの旅に発つ[8]。サンタ・フエ (Santa Fe) 経由でメキシコ市 (Mexico City) に23日着。ウルガイ通り69 (Avenida Urguay 69) にあるモンテ・カルロ・ホテル (Hotel Monte Carlo) に宿泊しながら，夫妻は４月迄メキシコの各地を旅した。４月１日に *The Plumed Serpent* に出て来る場面である闘牛見物に行き，また３日にはテオティワカン (Teotihuacan) で太陽と月の２つのピラミッドやケツァルコアトル (Quetzalcoatl) の寺院を見て，深い印象を受けたりした。５月にはチャパラ (Chapala) 湖に移り，湖畔のサラゴサ通り４番地 (Zaragoza 4) に住むことになった。

Lawrence はこの家で，５月10日迄には *The Plumed Serpent* を書き始めたのである[9]。この作品は最初彼は *Quetzalcoatl* と名付け，大変気に入っていたのであるが，後に出版者の助言で現在の題名 *The Plumed Serpent* と変更された[10]。Quetzalcoatl はスペイン人征服前のメキシコに於けるインディアン部族の自然神であり，緑の羽を持つガラガラ蛇で，古代にはテオティワカンの中心的な神であった。またサラゴサ通りのこの家は主人公 Kate Leslie の住む家でもある。

The Plumed Serpent の執筆はかなりの速さで進み，６月末には大半の部分が仕上がっていたのであるが，途中で放擲され中断されてしまった。そして Lawrence 夫妻は７月10日チャパラを去り，ニューヨークに行ってしまうのである。これは妻 Frieda がこのメキシコの地にうんざりし[11]，更に前夫 Weekley との子供に会って静かなイギリスの生活に浸りたい気持ちが強くなったからである。Frieda なしには，寂しくて１人では生活出来ない Lawrence は，相変わらず妻に圧倒され，妻のペースに振り回されているのであった。

アメリカからヨーロッパに渡り，イギリスにも行った後，Lawrence 夫妻は1924年３月初旬にアメリカに戻り，10月にメキシコに行き，今度はワハカ (Oaxaca) に住みつく。11月19日に *The Plumed Serpent* の再校を始め，翌1925年２月１日頃には終了している。

II

Aaron's Rod と *Kangaroo* の中で扱われてきた重要な主題である 'leadership' の問題は，*The Plumed Serpent* で文学的決着が付けられることになる。*Aaron's Rod* の最終部分で

Aaron が Lilly に指導者とは誰のことを言うのかと尋ねているが，Lilly は明確な回答は避けている。Lilly は自分を指導者に擬したいのであろうが，彼には指導者としての思想はあったとしても，具体的な行動力は何もなかった。この「指導者」は *The Plumed Serpent* に至ってやっと出現することになる。

前作 *Kangaroo* 迄は小説中の何処かでイギリスを舞台にしているが，本作品 *The Plumed Serpent* は Lawrence の10ある長編中，完全にイギリスを舞台にしていない唯一の作品となっている。Lawrence は今迄，常に自分がイギリス人と切り離されているという意識を持っており，第1次世界大戦中の本国の彼に対する迫害以来，益々その念は確固としたものとなっていった。更に彼の宗教に対する気持ちも，信じて身を任せたいと思っているキリスト教に対して，反対に近親憎悪的な感情を抱き，反キリスト者としての態度をかたくなに守り続けた。その結果彼はメキシコの地で，固有の宗教であるアステカの古い宗教に出会い，そこにキリスト教とは違う方向を見出した。これが本作品でメキシコの原始宗教復活の運動として扱われている。

この運動に係わる2人の男性に Lawrence は，*Aaron's Rod* の Aaron と Lilly の関係のより進展した関係を示している。Don Ramón Carrasco と Don Cipriano の関係がそれである。男性は1人の偉大な人間に従わなければならないし，女性も同様であると Lilly が Aaron に言っているが，Don Ramón はその様な男性として描かれている。一方，Cipriano は，Aaron の，心の中で思っているだけで，何等具体的な行動に移していない，Lilly に服従すべきだという考えを，現実に Ramón の忠実な部下として実行している。Lawrence の leadership についてのヴィジョンが，ここにより明確に実現されているのである。

更に，男性対男性の関係と同時に，男性対女性の関係もここでは描かれている。Kate Leslie と Cipriano の結び付きである。Kate はウィチロポチトリ (Huitzilopochtli) となった Cipriano に求婚され，迷った挙げ句結婚することになるが，この関係も，Lilly の説く「男性優位」のものとなっており，彼は支配的な男性となり，彼女はヨーロッパの独立心の強い女性の生き方を捨てて，自我を抑え服従していくことになる。Lawrence は今迄追求してきた男性対男性，男性対女性の関係に，この作品に於て何とか解決を見出したように見える。果してこれが彼の求め続けてきた真の解決であろうか。作品の中で検討してみよう。

Kate Leslie は今や中年の域にさしかかった，40歳の，誇り高い名門 Forester 家出身のアイルランド人女性である。世襲貴族は本質的に優秀であり，自分の身体の中を流れる血は一般の人の血と違って，優れた立派なものであるという教育を受けてきた。若くして，弁護士の Taylor と結婚し1男1女をもうけるが，ぬるま湯的な平々凡々とした生活に飽きた頃，アイルランドの自由と独立のために闘っている James Joachim Leslie と知合い，家庭を捨てて彼のもとに走った。彼女は Joachim をこれ以上不可能な程愛し，「女性の愛し得る限りの愛を以て」，「人間の究極迄」愛したのであるが，Joachim は闘いに倒れ，死んでしまった。人間の愛には限界があ

り，それを越えたものがあるのを知った彼女は，その時その限界を越えたのである。Joachim は死んで永遠の中に去ってしまったが，Kate も彼の後を追うように，生きながら，或る永遠の中に入って行った。そして，ヨーロッパの知性や伝統に対して不信や憎悪の念を抱き，ヨーロッパ的文明に見切りをつけて，新しい自己を発見しようとメキシコにやって来たのである。楽しく過ごした人生の前半も終え，中年という人生の転機にさしかかった今，彼女には何か自分の生活に根本的な変化が来るという予感があった。

Kate からは既に「友情とか，同情とか，人間愛とかに対する憧れ」は永遠に去ってしまい，「無限に祝福され」「理解を越えた平和」がそれに代わって彼女の心を占めてきた。この様に色々な経験をしてきた彼女の魂は十分に成熟し，今その花を咲かせようとしていた。咲かせる場所を求めて彼女はメキシコに来たのである。

> No, she no longer wanted love, excitement, and something to fill her life. She was forty, and in the rare, lingering dawn of maturity, the flower of her soul was opening. Above all things, she must preserve herself from worldly contacts. Only she wanted the silence of other unfolded souls around her, like a perfume. The presence of that which is forever unsaid.
>
> And in this horror and climax of death-rattles which is Mexico, she thought she could feel as well the silence of souls in bud. She thought she could see it in the black eyes of the Indians. She felt that Don Ramón and Don Cipriano both had heard the soundless call, across all the hideous choking.
>
> Perhaps this had brought her to Mexico : away from England and her mother, away from her children, away from everybody. To be alone with the unfolding flower of her own soul, in the delicate, chiming silence that is at the midst of things. (Chap. III)

本作品では，作者 Lawrence は男性である Ramón や Cipriano に主役を務めさせるのではなく，この様な人生経験を持つ女性，Kate を中心に話を運んで行き，彼女に焦点を当てているので，彼女の行動に彼らの動きが左右され，物語の流れも支配されている。*Aaron's Rod* では Aaron と Lilly が，*Kangaroo* では Sommers が主人公として描かれ，彼らは女性の自我の強さに苦しみ振り回されている。しかし，*The Plumed Serpent* では作者の視点が変わり，Kate 中心の筋の展開となっている。作者が彼女の心の中に入って行き，その心の動きを彼女自身の口で語らせ，女性の目から男性の世界を見て理解させる手法を用いている。これは，これ迄男性の世界を男性の目を通して描いていたが故に，作者の意図した世界を描くのに常に障害となっていた女性の存在を，今度は女性を主役にし，作者 Lawrence（＝男性）と同じ立場に立たせることによって，彼に有利なものに変え，彼にとって理想となる女性像を創造しようとしている工夫であると言えよう。

その出自から考えて，Kate は Frieda をモデルにしているようである。だが，これ迄描かれ

た Lawrence の作品中の主要人物には，殆ど常に作者自身が，程度の差はあれ，姿を現している。Frieda は，作者執筆当時，Kate と同い年の40歳であった。またヨーロッパに見切りをつけ，夫 Lawrence と共に他の文化圏に於ける無垢な社会に住みつくことを考えていた。この精神的背景も Kate のそれとほぼ同じものである。しかも，1916年の復活祭でのダブリンの蜂起，アイルランド独立運動の勃発，それに続くイギリス政府のアイルランド愛国者の圧殺などに，Lawrence は大きな衝撃を受けた。民主主義の高い理想を掲げているイギリスが，力づくで反対者を押さえつけ，殺し合う様子を見て，元々ヨーロッパ文明から疎外感を抱いていた Lawrence が Kate をアイルランド出身にしているのは，彼女に自分の思想の代弁者の役割を与えていると見なしてよいであろう。即ち，Lawrence は Kate に対して，Frieda がかくあって欲しいという，女性の理想像を与えているのであろう。

復活祭の次の日曜日に，Kate はメキシコ名物の闘牛を未だ見ていないので，1度は見に行かなければならないという義務的な理由で見物に行くことにする。従兄で社会主義者の Owen Rhys，若いアメリカ人 Villiers と彼女の3人で行ったのだが，闘牛場で見たこと全てに彼女は腹立たしい思いをするのであった。観客席ではメキシコ人の群衆との席についてのイザコザ。闘牛場の雄牛に対する闘牛士の卑怯で汚らわしい態度。殊に，勇ましい見世物を見る積もりでいた闘牛の残酷で見るに耐えない光景は，Kate に余りに驚愕の衝撃を与えたので，殆ど失神させる程であった。闘牛の最中に退場するのはメキシコ国家への侮辱であると分かっていても，彼女はこれ以上この場の異臭には耐えられずに退場してしまう。ここの場面で，メキシコ社会の根底に潜んでいる固有の暴力と生命軽視を彼女がはっきりと嫌悪している様子が，生き生きと表されているが，彼女のこの国に対する恐れの気持ちには，闘牛場でのこういった，激しい，心の中心迄動かすような衝撃を受けた気持ちが底流として流れているのである。

Kate はやっと外に出ることが出来たが，外にも闘牛場に押し掛けて来ているインディアンの群衆がどんどん増えており，この醜悪な人々は Kate にひどい嫌悪感を催させた。しかも外は激しい氷のような雨が降っており，彼女は途方に暮れてしまう。そこへ，短身で，浅黒く，皇帝髭に似た小さな黒い顎髭をはやした小柄な将校がやって来て，彼女に車を探してくれた。彼はインディアンでメキシコの将軍 General Viedma, Don Cipriano で，オクスフォード在学中に Kate の2番目の夫の弟 James Leslie と知合いであった。この2人の巡り会いは，物語の導入部として，今後の話の発展にとって非常に印象的である。常に心の奥底にメキシコに恐怖心と嫌悪感を持っている Kate のメキシコに対する典型的な反応が闘牛場で示され，こういう状況に陥った彼女を Cipriano が，ひいては彼の盟友である Ramón が手を貸して助けることになってゆくからである。

メキシコ到着後暫くして，Kate は40歳の誕生日を迎える。彼女にとって，40歳というのは人生の大きな節目であった。一生の半分は終わり，激動と変化の時は過ぎ，抑制と責任が中心に来

る落ち着きのある生活に入って行く筈の時が来ていた。

It was a blow, really. To be forty! One had to cross a dividing line. On this side was youth and spontaneity and "happiness." On the other side was something different: reserve, responsibility, a certain standing back from "fun."

She was a widow, and a lonely woman now. Having married young, her two children were grown up. The boy was twenty-one, and her daughter nineteen. They stayed chiefly with their father, from whom she had been divorced ten years before, in order to marry James Joachim Leslie. Now Leslie was dead, and all that half of life was over. (Chap. III)

ヨーロッパ文明に対する不信と憎悪から，新しい自分を見出す転機を求めてメキシコにやって来た Kate であったが，彼女には未だこの先の自分の姿が少しも見えてこない。

The bright page, with its flowers and its love and its stations of the Cross ended with a grave. Now she must turn over, and the page was black, black and empty.

The first half of her life had been written on the bright smooth vellum of hope, with initial letters all gorgeous upon a field of gold. But the glamour had gone from station to station of the Cross, and the last illumination was the tomb.

Now the bright page was turned, and the dark page lay before her. How could one write on a page so profoundly black? (ibid.)

彼女は自分自身とメキシコ及びメキシコ人との精神的距離の取り方が未だはっきり分かっていない。それ故，メキシコでの経験の１つひとつに好悪の感情が激しく動く。

And the natives squatting with their wares, large-limbed, silent, handsome men looking up with their black, centreless eyes, speaking so softly, and lifting, with small, sensitive brown hands the little toys they had so carefully made and painted. A strange gentle appeal and wistfulness, strange male voices, so deep, yet so quiet and gentle. Or the women, the small, quick women in their blue rebozos, looking up quickly with dark eyes, and speaking in their quick, coaxing voices. The man just setting out his oranges, wiping them with a cloth so carefully, almost tenderly, and piling them im bright tiny pyramids, all neat and exquisite. A certain sensitive tenderness of the heavy blood, a certain chirping charm of the bird-like women, so still and tender with a bud-like femininity. (ibid.)

一方，大学などの学校のフレスコ画を見学していた時，Kate は画家の憎悪の衝動，醜悪さ，俗悪さを見るだけで，先程見たインディアンの「特異な美しさ，肉体的存在としての或る豊かさ，体内の血の重々しい力」などは何も見出すことは出来なかった。そこにはただ革命後のブルジョア階級に対する威嚇主義があるだけで，描かれているインディアン達は「近代社会主義の経典中の象徴」や「近代産業と資本主義の犠牲者達の悲愁を示す群像」に過ぎなかったのである。彼女は絵を見，その説明を聞いてゆくに従って苛立ちや激烈な怒りへ駆り立てられた。メキシコという国に存在する何かが彼女を狂おしい程激怒させるのであった。

こんな或る日，Kate は The Gods of Antiquity Return to Mexico という見出しの新聞記

事を見た。この「古代の神々」とは亡びたアステカ族の神ケツァルコアトル（Quetzalcoatl）等のことであった。Quetzal はアステカ族が霊鳥とした鳥の名であり，Coatl は蛇で，Quetzalcoatl とは The Plumed Serpent という意味である。これは毒牙と翼を備えた蛇であり，更には色白の顔に顎髭を生やした神でもあった。「昼間の星のように，自ら見ながら，見られることのない目」のような存在。この神は年老いて，再び生の深い沐浴に浸るために，メキシコから天空に飛び去ってしまっていたのである。まばゆいばかりに混乱し矛盾した意味を持つケツァルコアトルは Kate の心を引き付けた。というのは，彼女のアイルランド流の精神は，明確な意味や，1つの固定した趣意の神に死ぬ程うんざりしていたからである。

神々は嵐の中の虹のように虹色であるべきだ。人間は自分自身の姿に似せて神を創り，神は自分を創った人間と共に老いてゆき，死んでゆく。しかし死んだ神の構成要素は人間の頭上高く猛威を振るい，それは余りにも膨大なので人間には聞き取れない響きを立てながら永遠にどよめき続けるのだ。神も人間も生まれ変わらなければならないのである。ケツァルコアトルの名前に接した時，Kate は女らしい茫漠とした行き方でこのように感得した。

メキシコ人達は「中核」も「真の自我」もなく，彼らの中心は「荒れ狂う暗黒の穴，大渦巻の中心」のようだ。そして彼らは殺戮と死滅の外は何も持ち合わせておらず，この国の革命は「死万歳！」といった「誰かの死」を求めるものでしかない。これがメキシコに来て以来，彼女が思いを巡らすことであった。この考えがケツァルコアトルに対して彼女に関心を抱かせ，ひいては彼女の過ぎ去った半生のこと迄思いを馳せさせたのであった。今彼女は本当の孤独に逃げ込むと，理解を越えた平和が，柔らかな花のような力が身の内に流入するのが分かった。過去の全てを捨てて，彼女も生まれ変わらなければならなかった。そのために，即ち，イギリスや母や子供達から離れて，万象の中にある微妙な，調和的な沈黙の中に，自分の魂の開きつつある花と共にだけいるために，メキシコに来たのであった。

サユラ湖に行く前に，Kate は Owen と Ramón の邸へ晩餐に出掛けた。そこで彼女は Cipriano のことをよりよく知る機会を持つことが出来た。彼は純粋なインディアンで，軍人らしく動作は機敏で，常に周囲に鋭く注意を向けていた。彼はイギリスで高等教育を受けていたが，本質的には野蛮人であり，彼の血管には「強力な爬虫類，メキシコの竜の暗欝に波立つ血」が流れているのを思わせた。

> But the curious blackness of his eyelashes lifted so strangely, with such intense unconscious maleness from his eyes, the movement of his hand was so odd, quick, light, as he ate, so easily a movement of shooting, or of flashing a knife into the body of some adversary, and his dark-coloured lips were so helplessly savage, as he ate or briefly spoke, that her heart stood still. There was something undeveloped and intense in him, the intensity and the crudity of the semi-savage. She could well understand the potency of the snake upon the Aztec and Maya imagination. Something

smooth, undeveloped, yet vital in this man suggested the heavy-ebbing blood of reptiles in his veins. That was what it was, the heavy-ebbing blood of powerful reptiles, the dragon of Mexico.

So that unconsciously she shrank when his black, big, glittering eyes turned on her for a moment. They were not, like Don Ramón's, *dark* eyes. They were black as black jewels into which one could not look without a sensation of fear. And her fascination was tinged with fear. She felt somewhat as the bird feels when the snake is watching it. (ibid.)

ヨーロッパ文明の中で育ったが，この文明に飽き足らない思いを抱いている Kate にとって，Cipriano の人間の根元的な本質をかいま見たことは，恐怖感の方が先に立ったとしても，彼に強烈な魅力でより一層引き付けられたことも意味した。

この気持ちの根底には，今や Kate は「善良で信用され，世界を現状のままにうまく進めて行こうとしているような男である最初の夫」よりは，Joachim のような「世界を変化させ，もっと自由な，もっと生気に満ちたものにしようと闘っている男」だけしか愛せない女性になっているという事実があろう。そしてしかも Cipriano は Ramón の幕僚的使従で，ケツァルコアトルの運動でメキシコに新生をもたらそうとしているのであり，Kate の文明化されたヨーロッパ的観念と反対の極にいたのである。Ramón たちの観念の世界というのは，個人の意志の主張と他の存在に対する強制という側面を持っていることが，Kate が Ramón と神について話している時に，明確となる。

"I rather hate this search-for-God business, and religiosity," said Kate.

"I know!" he said, with a laugh. "I've suffered from would-be-cocksure religion myself."

"And you can't *really* 'find God'!" she said. "It's a sort of sentimentalism, and creeping back into old, hollow shells."

"No!" he said slowly. "I can't *find God*, in the old sense. I know it's a sentimentalism, if I pretend to. But I am nauseated with humanity and the human will: even with my own will. I have realised that *my will*, no matter how intellingent I am, is only another nuisance on the face of the earth, once I start exerting it. And other people's *wills* are even worse."

"Oh! isn't human life horrible!" she cried. "Every human being exerting his will all the time—over other people, and over himself—and nearly always self-righteous!" (chap. IV)

Ramón は，観念も理想も人間の意志や欲望の道具に過ぎないし，また他人の上にも，自分の上にもあらゆる人間が自分の意志を行使し，常に1人よがりでいるのは嫌悪すべきことであると考えているのである。それを避けるために，彼は何か他のものを探し求めるのである。彼は Kate に何を探すのかと尋ねられると，次の様に答える。

"My own manhood!"

""What does that mean?" she cried, jeering.

"If you looked, and found your own womanhood, you would know."

"But I *have* my own womanhood!" she cried.

"And then—when you find your own manhood—your womanhood," he went on, smiling faintly at her—"then you know it is not your own, to do as you like with. You don't have it of your own will. It comes from—from the middle—from the God. Beyond me, at the middle, is the God. And the God gives me my manhood, then leaves me to it. I have nothing but my manhood. The God gives it me, and leaves me to do further." (ibid.)

自分自身の 'manhood'（男性であること），或は 'womanhood'（女性であること）は，自分を越えた真中の所に，大きな存在＝神からやって来るのであって，自分自身の意志で自由に自分の占有物には出来ないと Ramón は説く。未だ Kate は彼の魂を深く理解出来ない迄も，それは彼女の心の琴線に触れるものであった。そして Ramón の宗教運動はこの線上を進み，発展して行く。

Kate が Ramón の運動に更に深く関係していくのは，メキシコに留まる決心して，メキシコ市からサユラ湖に行ってからである。Owen がメキシコを去った後，彼女は Villiers をお供に連れて，Ramón の邸の近くにあるサユラ湖に赴いた。この湖を中心に Ramón は運動を展開していた。

サユラ湖に来る迄は，Kate はメキシコ人に対して苦々しい嫌悪感を抱いていたのに，ホテルに行くために，湖で舟に乗るとその船頭に好感を抱く。

The crippled boatman was pulling hard, with great strength and energy. When she spoke to him in her bad Spanish and he found it hard to understand, he knitted his brow a little, anxiously. And when she laughed, he smiled at her with such a beautiful gentleness, sensitive, wistful, quick. She felt he was naturally honest and truthful, and generous. There was a beauty in these men, a wistful beauty and a great physical strength. Why had she felt so bitterly about the country? (Chap. V)

辺りの状況は彼女が来たのを歓迎しているかのようであった。またケツァルコアトル運動の中心となっているこの湖は，Ramón 達の創る「新世界の中心地」である。Kate が乗った舟から見ると湖水は「精液」のように見える。また辺りの岸辺では，地上は乾燥しきって黄土色となって殆ど植物は見当たらないが，「鉄色がかった緑色の長い茎」をした大サボテンだけが「毒々しく地上のものではないような強力な光」できらめいている。このサボテンは男根を表し，この風景は男性の性行為を象徴している。即ち，Ramón の宗教運動は男性優位の思想の上に立脚するものであることを暗示していよう。

湖を舟で進んで行く途中，ケツァルコアトル神の信徒と出会った後，Kate は舟を漕いでいる船頭の姿の中に，メキシコのインディアンの神秘を感じ，彼と次の様な共感を感じることが出来た。

He pulled rhythmically through the frail-rippling, sperm-like water, with a sense of peace. And for the first time Kate felt she had met the mystery of the natives, the strange and mysterious gentleness between a scylla and a charybdis of violence; the small, poised, perfect body of the bird that waves wings of thunder and wings of fire and night, in its flight. But central between the flash of day and the black of night, between the flash of lightning and the break of thunder, the still, soft body of the bird poised and soaring, forever. The mystery of the evening star brilliant in silence and distance between the downward-surging plunge of the sun and the vast hollow seething of inpouring night. The magnificence of the watchful morning star, the watcher between the night and the day, the gleaming clue to the two opposites. (ibid.)

彼女は，このインディアンの中に「宵の明星の神秘」と「明けの明星の気高さ」を感得する。また船着場では古い死んだ神々の土器を受け取る。これらの一連の事柄は，彼女がメキシコという暗い世界に同化し，ケツァルコアトルの神を信じていくことになると予想させる通過儀礼の一種と見なすことが出来よう。

しかし Kate がメキシコやケツァルコアトルと完全に合体し一致するには未だ時間が掛かり，それらに対して理解と反発や魅力と恐怖の間を彼女の気持ちは大きく揺れ動く。最初はその振幅は大きく，徐々に小さくなって行く。そして最後には収束したかに見える迄になる。しかし実際にはこれは未だ先のことである。彼女は舟を降り，ホテルに入り，暫くするとまたもや辺りの光景に気味の悪さ，空虚さ，抑圧などを感じ不安になる。ここメキシコには彼女に漠とした恐怖心を抱かせるものばかりでなく，より実際的な恐怖心を起こさせる問題があった。Kate の周りに土賊達が出没するのである。この恐怖のため彼女はヨーロッパに帰りたくなる。しかし，最近のヨーロッパにあるのは，政治問題，ジャズ，くだらない神秘主義，浅ましい心霊論ばかりである。彼女は太陽と反対方向へ行きたくなかった。メキシコ人達は「生は広大無辺」であり，「死は底知れぬもの」であると感じさせてくれる。その上，彼女は「太陽と同一の方向に向かう世界」と共に居たいし，「巨大な太陽や無数の星を抱擁した力強い律動」を付与されたいと強く願うのである。更に彼女は自分の抱く恐怖の正体を知った。それは肉体的な恐怖でなく，魂の恐怖であった。人間は完全な自己，完全な魂，完成された自我を持っているとこれ迄考えてきたが，実際は未完成であり，時々矛盾した絶望的混乱に陥る動物であると悟るのであった。この様に Kate は混乱した状態のメキシコや，非理性的で動物的なメキシコ人達に共感を抱いてゆく。

Ramón が家を見つけてくれたサユラに居を移した Kate は，サユラの広場で土曜日に繰り広げられる光景に注意を引き付けられた。都会から来たおしゃれな若者達が広場でジャズのリズムに合わせて踊るのであった。娘達はきらびやかな薄物を身に着け，浅黒い顔には厚化粧をしていた。「道化役者か死体みたいな白い色」で変な不気味さを漂わせていた。若いしゃれ者の男達は娘達より品がよかったが，「12ヶ月以内に適当に太らされて芳香を付けられ，いずれかのメキシ

コの神の生贄にされるような顔付き」をしていた。この若者達の「精神」というものにインディアン達は徹底的に反抗する。彼らはその血に連なる魂は理解するが，ヨーロッパ文明の特質である「精神」を暗く野蛮に否定する。「近代精神」は受け付けないのである。

「精神」に突き動かされた若者達の踊りがインディアンの冷やかな否定によって崩れ去った後，今度はインディアン達が太鼓を打ち，太鼓を中心に円を描いて踊りを踊るのである。これは直接に血に呼応し，原始から続く魂が促す行動である。ここには生命の根源である，人が「直接に接触することの出来る，原始の昔から永続してきた魂」が，中心に横たわっており，見る者を強く引き付けるのであった。これはケツァルコアトルの宗教運動の布教活動の１つであった。

Kate はケツァルコアトルの頌歌が書かれている印刷物を貰う。環状になった蛇とその尻尾をくわえた１羽の鷲の素描画が描かれている印刷物には，次の様に書かれていた。

In the place of the west
In peace, beyond the lashing of the sun's bright tail,
In the stillness where waters are born
Slept I, Quetzalcoatl.
In the cave which is called Dark Eye,
Behind the sun, looking through him as a window
Is the place. There the waters rise,
There the winds are born.
On the waters of the after-life
I rose again, to see a star falling, and feel a breath on my face.
The breath said : Go ! And lo !
I am coming.
The star that was falling was fading,
Was dying.
I heard the star singing like a dying bird :
My name is Jesus, I am Mary's Son.
I am coming home.
My mother the moon is dark.
Oh brother, Quetzalcoatl
Hold back the dragon of the sun,
Bind him with shadow while I pass
Homewards. Let me come home.
.....
Jesus the Crucified
Sleeps in the healing waters
The long sleep.
Sleep, sleep, my brother, sleep.
My bride between the seas
Is combing her dark hair,

Saying to herself : Quetzalcoatl. (Chap. VII)

ヨーロッパ文明の根幹たるキリスト教。このキリスト教がメキシコに到来して既に長い年月が立った。だがこの宗教は当地に来ても大多数の民衆に何の恩恵ももたらさなかった。この国の民衆は相変わらず貧困に喘ぎ，疲弊しきっていた。イエスは年老いてしまい，疲れ，休息を求めていた。母マリアと共に，「回生の子宮」の中に去って行った。最早この国はイエスでは救われない。ここにメキシコの太古の神ケツァルコアトルが永い眠りから目を覚ましたのである。救世主としてメキシコを救済するために，長くこの異教の地を支配してきたイエスの位置に取って代わるのである。ここで Lawrence が，イエス，即ち宗教の世界統一的支配を目指すキリスト教を否定し，キリスト教を支柱とするヨーロッパ文明を排除しているのは，必ずしも単なるキリスト教批判が目的という訳ではなく，ヨーロッパ文明の下の支配的人種，白人の人間関係の批判がその根底にある。この Lawrence の主張は Kate の行動や思考に明らかに沿うものである。

しかし，Kate はこの時点では，ヨーロッパ的精神からは完全に脱し切れていないので，インディアン達の踊りや太鼓の音に引き付けられながらも反発するのである。

> Kate was at once attracted and repelled. She was attracted, almost fascinated by the strange *nuclear* power of the men in the circle. It was like a darkly glowing, vivid nucleus of new life. Repellant the strange heaviness, the sinking of the spirit into the earth, like dark water. Repellant the silent, dense opposition to the pale-faced spiritual direction.
>
> Yet here and here alone, it seemed to her, life burned with a deep new fire. The rest of life, as she knew it, seemed wan, bleached and sterile. The pallid wanness and weariness of her world! And here, the dark, ruddy figures in the glare of a torch, like the centre of the everlasting fire, surely this was a new kindling of mankind! (ibid.)

ところが踊りを見ているうちに，彼女は何時しか自分も釣り込まれて踊りの列に加わり，一緒になって踊るのである。そこでは男達は「大いなる男性」の中へ，女達は「大いなる女性」の中へ深く吸収され，Kate 自身は「大我」に没入し，彼女の女性は「大いなる女性」の中で完璧化された。そして彼女の指と踊っている相手の男の指が触れ合っている所で，静かな火花が明けの明星のようにきらめき，輝いていた。彼女の「大我」と男の「大我」の間に，接触の火花が明けの明星のようにきらめいていたのである。彼女はこの様にして，初めて身を以てケツァルコアトルの神秘に参入し接触することが出来たのであった。

こういう体験をした後でも，Kate は必ずしも完全にメキシコと一致した訳ではなく，相変わらず共感と恐怖，前進と後退を繰り返す。土賊の襲撃に伴う夜の恐怖と朝の解放感や，下女の Juana とその子供達に対する反感と同情が交互に彼女の心象風景の中に現れる。更に，彼女は Ramón の妻 Doña Carlota に会い，その熱烈なカトリック信仰に同情の念を禁じ得ず，その反動でケツァルコアトル信仰に疑念を持つといった心の揺れを生ずるのである。しかし，こうした

Kate の心的動揺とは関係なく，Ramón の宗教運動は急速にその姿を明らかにしてくる。

The Lord of the Morning Star
Stood between the day and the night:
As a bird that lifts its wings, and stands
With the bright wing on the right
And the wing of the dark on the left,
The Dawn Star stood into sight.

Lo! I am always here!
Far in the hollow of space
I brush the wing of the day
And put light on your face.
The other wing brushes the dark.
But I, I am always in place.
Yea, I am always here. I am Lord
In every way. And the lords among men
See me through the flashing of wings.
They see me and lose me again.
But lo! I am always here
Within ken. (Chap. XI)

Ramón はケツァルコアトルを象徴する代表者であり，メキシコの社会に於ける優者であり，指導者である。能力によって，位置付られるヒエラルヒー的社会の頂点に立つ優者であり，指導者であるが，単なる権力や利己的欲望などで支配者となるのではない。彼は明けの明星 (the Morning Star) と宵の明星 (the Evening Star) となり昼と夜の支配者となるのである。この「明けの明星」の概念はケツァルコアトル信仰に於ける思想の核となる概念である。Ramón は個人的な次元での人の出会いを否定し，真実の出会いとは人間の全存在の中核に於てなされるものと考える。この出会いの場所こそ，明けの明星が明け方の薄明にきらめくところであり，そこで1人ひとりの人間が寄り合って1つの魂を作る。この魂が明けの明星であり，存在そのものに昇華した男と女が出会い，接触するとそこから明けの明星が輝き出るのである。この光の下での出会いで，至上の喜びが生まれることになる。

意識の底に沈み込んで，Ramón はこの宵の明星であり明けの明星であり，且つ，地の蛇と天の鳥でもあるケツァルコアトルに地上に出現するように呼びかける。この蛇は世界の核心の炎の中に横たわり，眠っている。この蛇が生きていればこそ，地味は豊かで，大地は膨大な生命力に溢れている。人々はこの生命力を体内に流入させるために，Ramón の地の蛇への呼掛けにならって，大地を見おろし，柔らかに左手を下に垂らした。Kate も無意識のうちに，密かに指をドレスに当ててやんわりと垂らしたが，自分がどうなるか恐くなりその途端手を上げてショールの中に差入れてしまう。次の天の鳥への呼掛けで，天を仰いで右手を高く上げるときになると，人

々が手を高く上げても Kate は上げようとはしなかった。ケツァルコアトル到来の時に至っても，彼女の心は未だ逡巡を続けているが，Ramón の言葉には深い影響を受けたのは明かである。ケツァルコアトルは Ramón の呼掛けに応えて出現した。大地と天空の間に我々は生きている。その中にいる Ramón にケツァルコアトルは顕現の印を見せたのである。

Earth has kissed my knees, and put strength in my belly. Sky has perched on my wrist, and sent power into my breast.

"But as in the morning the Morning Star stands between earth and sky, a star can rise in us, and stand between the heart and the loins.

"That is the manhood of man, and for woman, her womanhood.

"You are not yet men. And women, you are not yet women.

"You run about and toss about and die, and still you have not found the star of your manhood rise within you, the star of your womanhood shine out serene between your breasts, women.

"I tell you, for him that wishes it, the star of his manhood shall rise within him, and he shall be proud, and perfect even as the Morning Star is perfect.

"And the star of a woman's womanhood can rise at last, from between the heavy rim of the earth and the lost grey void of the sky.

"But how? How shall we do it? How shall it be?

"How shall we men become Men of the Morning Star? And the women the Dawn-Star Women?

"Lower your fingers to the caress of the Snake of the earth.

"Lift your wrist for a perch to the far-flying Bird.

"Have the courage of both, the courage of lightning and the earthquake.

"And wisdom of both, the wisdom of the snake and the eagle.

"And the peace of both, the peace of the serpent and the sun.

"And the power of both, the power of the innermost earth and the outermost heaven.

"But on your brow, Men! the undimmed Morning Star, that neither day nor night, nor earth nor sky can swallow and put out.

"And between your breasts, Women! the Dawn Star, that cannot be dimmed.

"And your home at last is the Morning Star. Neither heaven nor earth shall swallow you up at the last, but you shall pass into the place beyond both, into the bright star that is lonely yet feels itself never alone.—(Chap. XIII)

過去にメキシコで死んだ神ケツァルコアトルは，目に見えない神 (the invisible Ones) が復活の冷水でその身を洗ってくれたので甦り，この地に大変な速さで戻りつつある。

この「目に見えない神」，即ち「太陽の後ろにある秘密の暗い太陽」によって眠りから覚めたケツァルコアトルは，鳥となって天と地の間を羽ばたき，飛翔し，躍動する。そして明けの明星の形になって人間の間に現れる時，男も女も真の男性，真の女性となることが出来，完全な自我を有し，完璧な存在となれる。ケツァルコアトルを通じた，発溂とした宇宙との交流，自然との

共存を以てしてこそ，人は真に生きて行けると，Ramón＝Lawrence は説いているのであろう。ヨーロッパ文明に侵され，堕落，腐敗しきって，その腐臭に耐え切れず窒息寸前の人類を救済する唯一の方法は，太古に於ける原始のおおらかな生き方しかなく，また生き生きとした生命力を肉体の中に保持することであるというのが，Lawrence の考えであり，Ramón がケツァルコアトル運動で目指すところである。

キリスト教否定の上に立つケツァルコアトル運動であれば，宗教的世界統一はその目的ではなく，神はその神を創造した民族を越えて他民族に迄影響を及ぼすことはない。チュートン民族に雷神やオーディンや宇宙樹が，地中海には新しいヘルメスが，インドには寂静清浄の梵天が甦るべきだ。そして各国民の第１の男達が世界の自然な貴族社会を構成し，有機的世界統一がなされるというのが Ramón の考えである。Lawrence の「リーダーシップ小説」群では，この様な指導者と被指導者という関係が，男と男，男と女の間に介在する。宇宙の中心から引き出される第２の力を獲得し，太陽叢や神経叢などから湧出する無意識の衝動や反応を精神的意識に迄昇華出来る指導者が，その宇宙の力ともいうべき「第２の力」を被指導者に伝え，意識させることが出来る。Ramón の場合，自分自身の感情の中枢へ到達する道を発見しており，この中枢を明けの明星と呼んでいた。この力の巧妙な伝導手段として，彼は歌や礼拝による儀式や肉体的高揚感を伴うダンス（Cipriano は自分の軍隊の訓練にもダンスを使っている）を多用している。

Ramón がこのケツァルコアトル運動に確固たる基盤を与え，次の発展段階に進むには，彼の女性との関係に明確な形が与えられなければならなかった。男性に関しては，指導する者と指導される者の関係があったにしても，程度の差はあれ「第２の力」を享受することが出来る。だが，女性はこの力に与っていないため，男性対女性の関係では服従関係となる。この関係を象徴的に示しているのはサユラ湖である。サユラ湖は既に述べたように，男性支配を暗示する地（精液のような湖水，男根のようなサボテン等）であり，そこを中心として発展しているケツァルコアトル運動では，男性に男根の神秘的な力を認めているからである。この思想の反対側に立脚する Carlota は「愛」を主張するカトリックの堅固な信者であり，女性優位の信念を抱く「偉大なる母」(Magna Mater) で，*Women in Love* に於けるヨーロッパ文明に侵された典型的な女性，Hermione 的なタイプの女性である。Lawrence が最も嫌うこのタイプの女性は，どの作品でも最終的には没落し，破滅してゆく。

男性は「最深奥の信念」を堅持し，その場で女性と結合しなければならない。最深奥の信念が２人の間で合致し，それが肉体的なものであるなら，その時その場で，２人は完全な結合が出来るのである。男性は女性に対する時，何時でも我儘を通したがるが，我儘を通すのは辱めるか辱められるかのどちらかになる。Carlota と Ramón の場合は，彼女の方が彼を辱めようとしているのである。２人の場合，「魂の中での結合」を１度もしたことがないし，ただ快楽のための結合を求め合っただけだったのである。今や彼女は「磔にされたイエスの方に向か」い，彼は「磔

にされず，磔にされ得ないケツァルコアトルに向かっている」。最早２人の間には明けの明星は輝くことはないし，２人で共にこの星の下にいることは不可能になってしまっていた。

一方，Carlota に同質の世界に属しているという同族意識を抱いていた Kate の意識は，ケツァルコアトル運動に関わりを深くしてゆくに従って，Carlota 的な世界から徐々に抜け出し，Ramón の説く世界に移行して行く。今や彼の書いた聖歌がメキシコ全土で読まれ，歌われ，それに合わせて踊る光景が見られた。そして Ramón はついにキリスト教を否定し，追い払って，ケツァルコアトル神を招来する一連の儀式の執行に着手する。かれはサユラの教会からキリストの聖像を運び出して，湖上の島の岩場で焼いてしまう。当然この行為に対する司教の復讐から彼は逃れられない。Kate が彼の家を訪問している時，司教の向けた刺客が数名彼を襲撃した。必死に闘うが，多勢に無勢，あわや命の危機という時，Kate の時機を得たピストルの発砲で，彼は危うく助かる。彼が重傷を負い，魂が消えかけている炎のようになっている時，彼女は，「もう１度この人の魂を燃え立たせて下さい。おお神様」と心底から祈る。彼女の意識にこの時点から変化が起こる。この事件の後，彼女は孤独になり，無為になり，完全に欲望から離れてしまい，あたかも虚無の荒野をさまよっているようであった。この茫々漠々とした精神の荒野の中で，意識の変化を彼女は自覚する。

> Only at the very centre of her sometimes a little flame rose, and she knew that what she wanted was for her soul to live. The life of days and facts and happenings was dead on her, and she was like a corpse. But away inside her a little light was burning, the light of her innermost soul. Sometimes it sank and seemed extinct. Then it was there again.
>
> Ramón had lighted it. And once it was lighted the world went hollow and dead, all the world-activities were empty weariness to her. Her soul! Her frail innermost soul! She wanted to live *its* life, not her own life. (Chap. XX)

Kate の自我は１度死に，ここに再び生を得た。新生した自我は，彼女に新しい意識を与えた。ヨーロッパ文明に育まれた旧い自我を捨て去った彼女は Cipriano の本当の姿を感じ取り，理解出来るようになった。２人してハミルテペクへ自動車で Ramón を見舞いに行く時，彼女は隣に座った Cipriano の実態を知った。

> As they sat side by side in the motor-car, silent, swaying to the broken road, she could feel the curious tingling heat of his blood, and the heavy power of the *will* that lay unemerged in his blood. She could see again the skies go dark, and the phallic mystery rearing itself like a whirling dark cloud, to the zenith, till it pierced the sombre, twilit zenith : the old, supreme phallic mystery. And herself in the everlasting twilight, a sky above where the sun ran smokily, an earth below where the trees and creatures rose up in blackness, and man strode along naked, dark, half-visible, and suddenly whirled in supreme power, towering like a dark whirlwind column, whirling to pierce the very zenith.

The mystery of the primeval world! She could feel it now in all its shadowy, furious magnificence. She knew now what was the black, glinting look in Cipriano's eyes. She could understand marrying him, now. (ibid.)

彼女は彼の中に「男根の神秘」を見た。そして「男根」=「牧羊神」の悪魔的な，圧倒的な力に彼女は魅せられ，抵抗出来ず，屈服し，服従してゆく。自我を放棄し，受動的行為は絶対的に充実したものであるという確固とした認識を抱くに至る。

As he sat in silence, casting the old, twilit Pan-power over her, she felt herself submitting, succumbing. He was once more the old dominant male, shadowy, intangible, looming suddenly tall, and covering the sky, making a darkness that was himself and nothing but himself, the Pan male. And she was swooned prone beneath, perfect in her proneness.

It was the ancient phallic mystery, the ancient god-devil of the male Pan. Cipriano unyielding forever, in the ancient twilight, keeping the ancient twilight around him. She understood now his power with his soldiers. He had the old gift of demon-power.

He would never woo: she saw this. When the power of his blood rose in him, the dark aura steamed from him like a cloud pregnant with power, like thunder, and rose like a whirlwind that rises suddenly in the twilight and raises a great pliant column, swaying and leaning with power, clear between heaven and earth.

Ah! and what a mystery of prone submission, on her part, this huge erection would imply! Submission absolute, like the earth under the sky. Beneath an over-arching absolute.

Ah! what a marriage! How terrible! and how complete! With the finality of death, and yet more than death. The arms of the twilit Pan. And the awful, half-intelligible voice from the cloud.

She could conceive now her marriage with Cipriano: the supreme passivity, like the earth below the twilight, consummate in living lifelessness, the sheer solid mystery of passivity. Ah, what an abandon, what an abandon, what an abandon!—of so many things she wanted to abandon. (ibid.)

'the ancient phallic mystery'='the male Pan' が象徴するのは，Cipriano の中の男らしさであり，Lawrence の考える男性優位の世界である。「悪魔のような恋人」(my demon-lover) と Kate に呼ばれる Cipriano は「魔神である牧羊神」(the god-demon Pan) が彼の心の大半を占め，思いやりなど殆どなかった。このことを知っており，彼に心の底で恐怖心を抱いている Kate は，彼との結婚に躊躇するが，Ramón に説得され，「大空の下の大地のような，絶対の服従」(Submission absolute, like the earth under the sky) と「薄明の下の大地のような完全な無抵抗」(the supreme passivity, like the earth below the twilight) に身を委ねることになる。Cipriano に身体を触れられた Kate は，四肢が溶ける金属のようにとろけてゆく気持ちになり，とろけた無意識に陥り，意志も，自我すらも去って，自ら没入した永遠の火の外の全て

を意識しなくなった。Cipriano と結婚する決心をした Kate は Ramón の手で結婚式を取り行ってもらう。この様にしてケツァルコアトルの儀式による結婚で，世俗の結婚ではないにしても，彼女はウィチロポチトリの花嫁となった。それからは，Kate は時間の観念がなくなり，以前には恐れた暗黒の中に独り閉じ込められる夜を恐れなくなった。意識に大きな変化が生じたのである。

聖像が運び出され，焼却された後1週間閉鎖されていた教会が，ケツァルコアトルを招来するために再び開かれることとなった。そこでは今やRamón が，生きているケツァルコアトル (the living Quetzalcoatl) となって，教会の会衆の前に姿を現わし，我こそは「明けの明星の子」，「鷲と蛇のケツァルコアトル」と自ら高らかに宣言する。開会の式典が最高潮に達した時，薄い黒いドレスを着た Carlota が金切り声を上げて，イエスと聖母マリアを讃えながら，Ramón の執行している式典を阻止しようとする。顔面蒼白となり，肉体は痙攣し，祭壇の前迄進むと，色の変わった唇に泡を吹き，どんよりした目をして，失神し，そこで倒れてしまった。しかし，この彼女の行為は Ramón には何も影響を与えることなく式は進んで行く。Carlota と Ramón の間には，最早「星」は存在しないのであった。

死の床に横たわる Carlota の枕元で，Cipriano は彼女が Ramón から，「肉体の酒」と「魂の秘密の油」を受け取るばかりで，自分のものは彼に出し惜しみして与えることはなかったと彼女を罵倒する。彼女は生命力の盗人であり，大空からは陽光を，大地からは生気を盗み，自らは何も与えることのない，巧妙な，冷酷な，ずるい偽善的な盗人であったのだ。Carlota の枕頭に座って，Cipriano の痛罵を聞き，外から聞こえる生気に満ちた太鼓や歌に耳を傾け，踊りを眺めながら，Kate は，青い顔をして死に行く彼女を看護していた。[12] この光景は生と死が対峙したもので，死にゆく Carlota の表すヨーロッパ現代文明のメキシコからの撤退と，Kate の耳に聞こえる「力と生命の歓喜の情を込めた無慈悲などよめき」，即ち土着の神ケツァルコアトルの再来とメキシコ人の精神の復活を対照的に示していると言えよう。

Kate はこれら一連の出来事に遭遇して，Lawrence の理想とする，自我の硬い殻を脱ぎ捨てた，赤裸々な真の女性の姿を現わしてくるのである。

> And Cipriano, as he sat in the boat with her, felt the inward sun rise darkly in him, diffusing through him; and felt the mysterious flower of her woman's femaleness slowly opening to him, as a sea-anemone opens deep under the sea, with infinite soft fleshliness. The hardness of self-will was gone, and the soft anemone of her deeps blossomed for him of itself, far down under the tides. (Chap. XXI)

少しずつメキシコの社会とケツァルコアトルの宗教運動に同化しつつあった Kate であったが，Ramón と Cipriano が行う，Ramón 襲撃犯人達の処刑の儀式の光景を目撃した後，大きな衝撃を受け，不安な気持ちで一杯になり，儀式の残酷さについて考え悩む。Cipriano に関しても，彼は彼女の内部にある，彼女の魂，自我の星とも言うべき，1つの小さな明けの明星を認めはし

ないだろうし，彼にとっては彼女は単に彼の呼び声に対する呼応，彼の刃の鞘，彼の雨に対する大地に過ぎないのだというように思いを巡らせていく。彼と共に進んで行くとこの先どうなるのであろうか。Cipriano に対する自分の姿，位置関係がはっきり把握出来ずに思い悩むのである。

例え，Kate が処刑の残虐さに衝撃を受け，思い惑ったにしても，既に彼女はケツァルコアトルの祭式に則り Cipriano と結婚した身であり，Ramón の宗教の影響下から抜け出せない程，この世界に深入りしてしまったのであれば，生きているウィチロポチトリの花嫁マリンチになってくれという Cipriano の再三の頼みを拒み通す訳にはいかない。彼女は花模様の緑衣を身に着けてメキシコの母なる女神マリンチとなった。以前 Cipriano の前で，死んだ夫の話をして，涙を流した時，聖母マリアを彼に彷彿させた Kate (Chap. III) は，ここでメキシコの地母神となった。前のケツァルコアトルによる結婚式に於ける Cipriano の誓約の言葉「この女は我が大地」や聖歌の1節「その時，マリンチの水は落ち，一面の緑をなす」などから，マリンチは万物の生成力と根源的な生命力の象徴であることがはっきりしよう。この場で，彼女はキリスト教をその精神的土台に持つヨーロッパ旧世界に於ける現代文明から脱け出し，旧い自我を捨て去った。そしてメキシコという新大陸の中で生れ変り，この地に同化し，処女となって，ウィチロポチトリの花嫁マリンチとして再生したのである。

一方，Ramón は Carlota 死後間もなく，若いインディアンの Teresa という女性と結婚する。彼女は Kate には，回教国の後宮の女，女の奴隷，自己売春の女のように見える。一旦は個性や自我意識を捨てた Kate であったが，未だその全てを心の中から拭い去ることが出来ていない。Teresa の服従的な態度によって今や回教国のサルタンのような満悦の表情を浮かべている Ramón に，男性に対する女性の服従ということにこだわりを捨て切れない Kate は怒りの気持ちを抑えられない。Kate は Teresa に，Ramón は Cipriano よりずっと女性に服従を求めていると言うと，彼女の憤然とした反撃にあう。彼女と Ramón の間にあるのは服従関係ではなく，お互いを任せ合う信頼関係である。彼は Teresa に服従を要求することはなく，彼女が静かに自分を任せるのを望み，彼も彼女に自分を任せている。即ち，2人の間には静かで自然な心が通い合っているのである。だから，男が全力で物事をやり遂げようとしている時，決してそれに逆らわないと Teresa とは言う。

> When a man is *warm* and brave—then he wants the woman to give him her soul, and he keeps it in *his* womb, so he is more than a mere man, a single man. I know it. I know where my soul is. It is in Ramón's womb, the womb of a man, just as his seed is in my womb, the womb of a woman. He is a man, and a column of blood. I am a woman, and a valley of blood. I shall not contradict him. How can I? My soul is inside him, and I am far from contradcting him when he is trying with all his might to do something that *he* knows about. He won't die, and they won't

kill him. No! The stream flows into him from the heart of the world: and from me. (Chap. XXV)

夫との信頼関係に基づく従順さを彼女は示している。この言葉を聞いて，Kate はこれを奴隷の道徳であり，1人の男のためにだけに生きている女の惨めな考え方と憤ろうとするがうまくいかない。Kate は既にメキシコの地との同化を1度経験した上に，「子宮」とか「血の柱」，「血の谷」という言葉を多用する作者 Lawrence の化身とも言うべき Teresa には，あがらうことは出来ない。腹立たしい気持ちと同時に，羨む気持ちも抱くのである。

Kate は Cipriano とケツァルコアトルによる結婚をしたが，彼との生活は変則的なものであった。夫は妻と共に居る時は，時折妻を圧倒するような気持ちにするが，軍人として出て行ってしまうと，妻は本来の自分の姿に戻るのである。しかし，2人が法的に結婚しアラゴン荘に住むようになると，2人の関係は永続的なものとなった。そこで彼女は「奇妙な，重々しい，絶対的な受動的生態」(the strange, heavy, positive passivity [Chap. XXVI]) に，今迄味わったこともないような絶対的安息を覚えた。そして Kate は徐々に Cipriano に屈服してゆくのである。

Cipriano は刺激的なことを嫌い，避けた。Kate が彼に生真面目に話そうとすると，彼は話すことの刺激的な性質に気付いて，それを避けたし，愛の交わりが刺激の炎と摩擦的な官能的快感の痙攣に満たされていることを Kate に気付かせて避けたのであった。

She realised, almost with wonder, the death in her of the Aphrodite of the foam: the seething, frictional, ecstatic Aphrodite. By a swift dark instinct, Cipriano drew away from this in her. When, in their love, it came back on her, the seething electric female ecstasy, which knows such spasms of delirium, he recoiled from her. It was what she used to call her "satisfaction." She had loved Joachim for this, that again, and again, and again he could give her this orgiastic "satisfaction," in spasms that made her cry aloud.

But Cipriano would not. By a dark and powerful instinct he drew away from her as soon as this desire rose again in her, for the white ecstasy of frictional satisfaction, the throes of Aphrodite of the foam. She could see that to him, it was repulsive. He just removed himself, dark and unchangeable, away from her.

And she, as she lay, would realise the worthlessness of this foam-effervescence, its strange externality to her. It seemed to come upon her from without, not from within. And succeeding the first moment of disappointment, when this sort of "satisfaction" was denied her, came the knowledge that she did not really want it, that it was really nauseous to her.

And he, in his dark, hot silence would bring her back to the new, soft, heavy, hot flow, when she was like a fountain gushing noiseless and with urgent softness from the volcanic deeps. Then she was open to him soft and hot, yet gushing with a noiseless soft power. And there was no such thing as conscious "satisfaction."

What happened was dark and untellable. So different from the beak-like friction of Aphrodite of the foam, the friction which flares out in circles of phosphorescent ecstasy, to the last wild spasm which utters the involuntary cry, like a death-cry, the final love-cry. This she had known, and known to the end, with Joachim. And now this too was removed from her. What she had with Cipriano was curiously beyond her knowing: so deep and hot and flowing, as it were subterranean. She had to yield before *it*. She could not grip it into one final spasm of white ecstasy which was like sheer knowing. (Chap. XXVI)

Kate の内部での，ヨーロッパ的性愛の象徴アフロディテの死，摩擦による官能的快感の消滅は，Cipriano と彼女との間に人間の根源から湧き出る性の関係をもたらすようになった。

Kate は物語の最後の章でも未だヨーロッパへの愛着を捨て切れないように見えるが，ロンドンへクリスマスに間に合うように帰りたいと切望し，帰ることを決心しても，身の回りのメキシコ・インディアン達の生活に心が引かれ，生まれ立ての子馬の姿に目を引き付けられる。

Glancing up, Kate met again the peon's eyes, with their black, full flame of life heavy with knowledge and with a curious re-assurance. The black foal, the mother, the drinking, the new life, the mystery of the shadowy battle-field of creation: and the adoration of the full-breasted, glorious woman beyond him: all this seemed in the primitive black eyes of the man. (Chap. XXVII)

インディアンの原始的な黒い目の中に現われるこれらのものは Kate の心に共感を起こさせるのである。一方，ロンドンでの生活に付いて考えてみると，自分の周りにいるのは上品な衣裳を身に着け，当世風なおしゃべりをしながらも，肉欲に振り回され，みだらな生活をしている雌猫のような中年の女性が多く，もしその仲間に彼女が戻ったなら，この様に腐敗した生き方をする女性達の間で生きなければならないのである。そして次第に人間としてはめちゃめちゃになり，「哀れみと反発を催させる意地悪婆」になってしまうであろう。そこでの生活では，自分がおぞましく１人孤独に老いてゆく姿しか彼女には思い描くことが出来なかった。今やロンドンでの生活は彼女にとっては自由な身動きも出来ない牢獄のように思えるのであった。

"No!" she said to herself. "My ego and my individuality are not worth *that* ghastly price. I'd better abandon some of my ego, and sink some of my individuality, rather than go like that."

After all, when Cipriano touched her caressively, all her body flowered. That was the greater sex, that could fill all the world with lustre, and which she dared not think about, its power was so much greater than her own will. But on the other hand when she spread the wings of her own ego, and sent forth her own spirit, the world could look very wonderful to her, when she was alone. But after a while, the wonder faded, and a sort of jealous emptiness set in.

"I must have both," she said to herself. "I must not recoil against Cipriano and Ramón, they make my blood blossom in my body. I say they are limited. But then

one must be limited. If one tries to be unlimited, one becomes horrible. Without Cipriano to touch me and limit me and submerge my will, I shall become a horrible, elderly female. I ought to *want* to be limited. I ought to be *glad* if a man will limit me with a strong will and a warm touch. Because what I call my greatness, and the vastness of the Lord behind me, lets me fall through a hollow floor of nothingness, once there is no man's hand there, to hold me warm and limited. Ah yes! Rather than become elderly and a bit grisly, I will make my submission; as far as I need, and no further." (ibid.)

彼女は「強い意志」と「温かい接触」で，自分の自由を限定し制限してくれる男性に服従してゆくことになるのである。Kate の心の揺れの振幅はここでやっと，「必要な範囲」という「限定された範囲」の中であったとしても，「自由の放棄」に対する積極的意義，即ち男性への服従という１点に於て収束したのであった。ここに「リーダーシップ小説」群に於ける作者 Lawrence の結論が見られよう。Lawrence はこの作品で Kate と Ramón, Cipriano を通じて男性対女性の関係，Ramón と Cipriano を通じて男性対男性の関係をほぼ自分の思う様に描き切ることが出来たと言えよう。

注(1) この作品が最初に出版されたのは，1920年11月９日である。予約者のみの限定私家版として，ニューヨークで出版され，1921年６月にロンドンで出版された。

(2) *D. H. Lawrence; The Critical Heritage:* pp. 168-172

(3) *Portrait of a Genius, But...:* p. 241

(4) Letter to Earl Brewster, 2 November 1921 (*The Cambridge Edition: The Letters of D. H. Lawrence, vol. IV*, pp. 108-9, 以上 *Letters IV* と省略)

(5) *Phoenix:* p. 142

I think New Mexico was the greatest experience from the outside world that I have ever had. It certainly changed me for ever. Curious as it may sound, it was New Mexico that liberated me from the present era of civilization, the great era of material and mechanical development. Months spent in holy Kandy, in Ceylon, the holy of holies of southern Buddhism, had not touched the great psyche of materialism and idealism which dominated me. And years, even in the exquisite beauty of Sicily, right among the old Greek paganism that still lives there, had not shattered the essential Christianity on which my character was established. Australia was a sort of dream or trance, like being under a spell, the self remaining unchanged, so long as the trance did not last too long. Tahiti, in a mere glimpse, repelled me: and so did California, after a stay of a few weeks. There seemed a strange brutality in the spirit of the western coast, and I felt: O, let me get away!

(6) *Not I, but the wind...,:* p. 128

Mabel and Lawrence wanted to write a book together: about Mabel, it was going to be. I did not want this. I had always regarded Lawrence's genius as given to me. I felt deeply responsible for what he wrote. And there was a fight between us, Mabel and myself: I think it was a fair fight. One day Mabel came over and told me she didn't think I was the right woman for Lawrence and other things equally upsetting and I was thoroughly roused and said: "Try it then yourself, living with a genius, see what it is like and how easy it is, take him if you can."

(7) Letters to Mabel Dodge Luhan, [1 December 1922] (*Letters IV*, p. 346)

(8) Letters to Robert Mountsier, [18 March 1923] (*Letters IV*, p. 411)

(9) *Not I, but the wind...:* p. 131

Lawrence went to Guadalajara and found a house with a patio on the Lake of Chapala. There Lawrence began to write his "Plumed Serpent." He sat by the lake under a pepper tree writing it. The lake was curious with its white water. My enthusiasm for bathing in it faded considerably when one morning a huge snake rose yards high, it seemed to me, only a few feet away. At the end of the patio we had the family that Lawrence describes in the "Plumed Serpent," and all the life of Chapala.

(10) Letters to Blanche Knopf, [23 May 1925] (*Letters V*, p. 256)

We'll agree to call the Mexican novel—*The Plumed Serpent*—though it sounds like a certain sort of 'lady in a hat.'

(11) *Not I, but the wind...* : p. 132

It was getting dusky and suddenly I came on a huge stone snake, coiling green with great turquoise eyes, round the foot of a temple. I ran after the others for all I was worth.

I got a glimpse of old Mexico then, the old sacrifices, hearts still quivering held up to the sun, for the sun to drink the blood : there it had all happened, on the pyramid of the Sun.

And that awful goddess, who, instead of a Raphael bambino, brings forth an obsidian knife. Fear of these people who don't mind killing and don't mind dying. And I had seen a huge black Christ, in a church, with a black beard and long woman's hair and he wore little white, frilly knickers. Death and sacrifice and cruel gods seemed to reign in Mexico under its sunshine and splendour of flowers and lots of birds and fruit and white volcano peaks.

この様に Frieda は古いメキシコが掻き立てる不安な気持ちや恐怖などに辟易していた。

(12) 作者はこの作品の中で，主筋でも副筋でも，二つの対立する概念を頻繁に対照し物語の進展に大変役立てている。指導者対被指導者，男対女，明と暗，光と陰，ヨーロッパ文明とメキシコ土着文化など，枚挙に暇が無いが，ここでは生と死，生命の喜びと虚しさが効果的に表されている。*Study of Thomas Hardy*「トーマス・ハーディ研究」で言及されている Thomas Hardy の作 *Jude the Obscure* 中の Jude が死の床に横たわり，外のお祭騒ぎの歓声を聞きながら，自分の生まれてきたことを呪って「ヨブ記」第3章にあるヨブの嘆きの言葉「私の生まれた日は滅び失せよ」を血を吐くような思いで呟いている場面とこの光景は酷似している。

参考書誌

1. *The Plumed Serpent: The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence:* (ed.) L. D. Clark :Cambridge University Press : 1987.
2. Roberts, Warren, James T. Boulton and Elizabeth Mansfield (eds.) : *The Cambridge Edition : The Letters of D. H. Lawrence : vol. IV, 1921-24 :* Cambridge University Press : 1987.
3. Boulton, James T. and Lindeth Vasey (eds.) : *The Cambridge Edition : The Letters of D. H. Lawrence : vol. V, 1924-27 :* Cambridge University Press : 1989.
4. Huxley, Aldous (ed.) : *The Letters of D. H. Lawrence :* William Heinemann : 1956.
5. Moore, Harry T. (ed.) : *The Collected Letters of D. H. Lawrence ;* Vol. II : Heinemann : 1965.
6. Aldington, Richard : *Portrait of a Genius, But... :* William Heinemann : 1950.
7. Carswell, Catherine : *The Savage Pilgrimage ; A Narrative of D. H. Lawrence :* Chatto & Windus : 1932.
8. Daleski, H. M. : *The Forked Flame : A Study of D. H. Lawrence :* Faber and Faber : 1965.
9. Draper, R. P. (ed.) : *D. H. Lawrence : The Critical Heritage :* Routledge & Kegan Paul : 1970.
10. Holderness, Graham : *Who's who in D. H. Lawrence :* Hamish Hamilton : 1976.
11. Hough, Graham : *The Dark Sun : A Study of D. H. Lawrence :* Duckworth : 1956.
12. Lawrence, Frieda : *Not I, But The Wind... :* William Heinemann : 1935.
13. ——————, E. W. Tedlock, Jr. (ed.) : *The Memoirs and Correspondence :* Alfred A. Knopf : 1964.
14. Leavis, F. R. : *D. H. Lawrence ; Novelist :* Chatto & Windus : 1967.
15. Moore, Harry T. : *The Intelligent Heart :* Farrar, Straus & Young : 1954.
16. ——————; *The Life and Works of D. H. Lawrence :* George Allen & Unwin : 1951.

17. Nehls, Edward : *D. H. Lawrence ; A Composite Biography ; vol. I, 1885-1919 :* The University of Wisconsin Press : 1977.
18. ——————: *A Composite Biography ; vol. II, 1919-1925 :* The University of Wisconsin Press : 1977.
19. Tiverton, William : *D. H. Lawrence and Human Existence :* Rockliff : 1951.
20. 井上義夫：ロレンス：小沢書店：1983.
21. 伊藤整・永松定（訳）：A. ハックスレー（著）：D. H. ロレンスの手紙：弥生書房：1971.
22. 北沢滋久：D. H. ロレンス：墨水書房：1973.
23. 倉持三郎：D. H. ロレンス…小説の研究：荒竹出版：1976.
24. 柴田多賀治：ロレンス文学の世界：八潮出版：1974.
25. 照屋佳男：現代イギリス文学試論：エイジ出版：1980.
26. 西村孝次（編）：ロレンス：研究社：1971.
27. 羽矢謙一：D. H. ロレンスの世界：評論社：1978.
28. 村岡勇：D. H. ロレンス：研究社：1970.
29. 森晴秀：ロレンスの舞台：山口書店：1978.
30. 山川鴻三：思想の冒険：研究社：1974.
31. 二十世紀英文学研究会（編）：D. H. ロレンス：金星堂：1986.